



＜日本株市場は米国株・欧州株市場に置いて行かれて、モヤモヤ相場が続いている＞

・新年の日本株市場はモヤモヤ感の強い相場展開が続いている。日経平均株価は、年末年始の12月27日、1月7日に4万円台を回復したが、全く乗り切れない。左図を見ての通り、昨年10月以降、ほぼ「3万9000円」を挟んでの上下幅1000円というボックス推移に陥っている。一方、米国株市場は、一時は停滞していたが、1月半ば以降に盛り返してNYダウ、NASDAQ総合指数とも、再び史上最高値を窺う動きとなっている。欧州株市場もEUの利下げだけを背景に、厳しい景況感の中でも、独DAX、仏CAC40、英FTSE100が軒並み史上最高値を更新している。日本株市場だけが、一人置いて行かれたモヤモヤした低調な推移が続いている。もっとも、一方的に下げ続けるのではなく、昨年10月28日以降、終値で3万8000円を割ることなく推移している。

・トランプ大統領は1月20日の就任式の前から過激な発言を続けており、就任式後は乗りに乗って「大統領令」を乱発している。意外に株式市場を激しく刺激することは避けているように見えるが、今後、どのように世界に影響を与える政策を繰り出してくるのか、ロシア、北朝鮮、中東地域を相手に地政学リスクに対して鎮めるのか煽る結果になるのか、様子を見守るしかない。

＜モヤモヤ相場は企業業績見通しが明快に確認される25年夏過ぎが転換点になろう＞

・日本のモヤモヤ相場は、恐らく、企業業績見通しに対する不透明感、不安感のせいだと考える。日経225ベースの予想EPSが「2500円」で跳ね返されて頭打ちとなっている。なので、期待が盛り上がりながら予想PERも「16倍」割れのままで推移している。25年3月期に関しては、想定外に円安気味で推移していることや、インバウンド需要、日銀利上げに銀行の収益好調などで問題ないが、焦点は来26年3月期だ。多くのストラテジストの新年の相場見通しは、概ね、25年後半あるいは25年末に「4万5000円前後」と強気な見方が多い。そして、その理由をほぼ「企業業績の好調持続、としているが、正直なところ根拠はない。日米金利差が広がった状態が続くことから極端な円高への反転はないが、企業は慎重な円高を前提とし、なおかつトランプリスクを織り込み、更には人件費上昇や投資拡大などのコスト増を理由に、5月のGW前後に一斉に発表される26年3月期の業績見通しは例年通りに慎重で、全体集計は減益見通しとなる可能性が大きい。

・もっとも、結果的には26年3月期が「5年連続最高益」となり、予想EPSも「2650～2750円」程度まで拡大、期待が高まれば予想PERは「16.5～17.5倍」まで上昇、日経平均株価の「4万5000円」は充分にあり得る。しかし、それが明らかになるのは25年後半だ。他に株式市場を刺激する材料がないか限りは、少なくとも25年夏まではモヤモヤ相場が継続することになるかも。

・今後は、焦らずに「ターゲット銘柄」を定めて、株価の展開をウオッチして、業績内容・見通しをしっかりと確認した上で、自信を持って、投資対象として投資タイミングを狙って行きたい。

・なお、いきなり出てきた「中国AIディープシーク」によってNVIDIAが駆逐されることはないし、AI普及が加速することになれば、半導体需要を押し上げる。半導体需要はAIのみではない。従って、半導体関連の株価急落が続くようであれば、大きな投資のチャンスだと考える。